

Title	高橋哲夫著 安積開拓史：ある偉大な遺産
Sub Title	
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.8 (1963. 8) ,p.787(103)- 788(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19630801-0103
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630801-0103">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630801-0103</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



は帰農し、さらに圧倒的大部分は下層社会に沈没し、ルンペン・プロレタリア化してしまったのである。

本書は、これらのうち、帰農士族に光をあて、「開墾創始の地」といわれる安積地方の疎水開墾を中心とした開拓事業を貴重な未発表史料をふくむ膨大な史料を駆使して克明に追究したものであるが、その内容は次のようにな章からなっている。

第一章・開拓のあけぼの、第二章・用水を求めて、第三章・刃を鍔にかえて、第四章・士族のゆくえ、第五章・開拓地の人びと、附録一・史料（二八項）、附録二・参考文献。

安積地方は郡山市周辺にあたり、当時、広大な原野を有しながら、灌漑設備の欠陥などにより放置されたままであった。ところが明治四年頃から福島県では独自に安積地方の中央にある大槻原の開墾を企て、富商の出資により開成社を設立し、安積開拓に着手した。やがて、西南戦争後の明治二年頃になると、ますます深刻化してゆく士族の没落に対し、政府は国営事業として安積全域の開拓にのりだすが、それによって九州の久留米をはじめ全国各地から帰農士族が移住し、大原野の開

拓に従事することになったのである。この入植者の多くは下級士族であったが、開拓の道はけわしく、悪戦苦闘の連続であった。その

結果、猪苗代湖から水を導入する疎水工事の完成をみるにいたり、収穫量などでは問題はないものの、原野の耕地化など開拓事業そのものは進展したといえる。しかし他方で、その担い手となつた士族については、転職した若干の成功者をのぞき、多くの零落し、あるいは小作人となり、あるものは脱落して離村し、またあるものは罪人となるなど、士族授産の目的ははたしきずになってしまった。だが、それでもかかわらず、現在八千町歩の水田を灌漑して安積地方農耕の支えとなり、しかも郡山周辺の工業化に寄与してきた

遺産」となつて今日も生きている。

著者は、この過程を從来閑却されがちであった「開墾に直接従事した士族の動向や、一般移住者、あるいは開成社の小作人等、総じて安積地方における人間関係」を浮き彫りすることによって生き生きと描きあげている

が、文章の平易さと共にその手法は成功的で、深い感銘をもつて「近代史屈指の雄大な

ドラマ」をわれわれに語りかけてくれる。ほ

かに本書の特色をあげるならば、著者も指摘

するとおり、安積開拓（士族中心）とその先

と一般民による）を区別するなど、歴史的推

移を明確にとらえていること、これまでのよ

うな疎水史中心の研究を是正していること、

開成社員をはじめ多くの人物の詳細な究明、

士族の移住定着没落過程やその実績などの跡

づけ、士族移住者と一般入植者や小作人の関

係の解明、さらに豊富な史料や現地踏査によ

る実証的研究などの点である。

しかし、これらの諸点についても、部分的にはさらに深い解明が必要と思われる点もないうわけではなく、福島県ないしは我が国全体の社会的変革との関係や、他の士族層との相関的な把握等も次の段階ではより深く考慮されてよいのではないかと思われる。だが、それは本書の範囲外の課題であるといえ、いずれにして、本書はみすこされがちな特殊部門に真摯な態度でとりくんだ労作であり、近代史研究における一つの成果といえるであろう。（理論社・三八年三月刊・B6・三六六頁・八〇〇円）

一 小松隆二一